

科学の時代と文学

——大正から昭和へ——

一 科学の時代

大正一四年三月に金星堂から出版された武野藤介著『表現の研究』に、加藤武雄が寄せた「新時代即科学時代」という短い文章が載っている。『表現の研究』は「新文章作法の叢書」というシリーズもののひとつで、この叢書の広告文によると、「新しい文章を作らんとする人、味はんとする人の為につつた、最も親切な作法書」だそうだ。

その内容は、前半部分が「月」、「朝」、「春」などの項目ごとに、この叢書が出版された当時の小説の中から項目を表現している文章を紹介し、その妙を解説するというもので、後半は「新時代に關する諸家の随感」と題し、水守亀之助、葛西善蔵、広津和郎、横光利一のように当時の文壇で活躍していた作家・批評家たちの文章を集めたものとなっている。そのトップバッターが、冒頭で述べた加藤武雄の文章だ。加藤武雄は今では忘れられかけた作家だが、短編集『郷愁』や長編小説『惱ましき春』などの作品で知

られ、トップバッターというところから当時の文壇内の地位も想像がつく。

城 所 弘 実

現代は科学の時代である、未来は更に更に科学の時代であらう。而して、近頃、いろいろに論じられる新時代といふものと、此の新興科学精神との間には、かなり深い関係があるやうに想はれる。切言すれば新時代即科学時代とでも云ひ度いくらゐに想はれる。

加藤は現代を「科学の時代」と呼び、当時論じられていた「新時代」と「新興科学精神」との間に深い関係があるとみているのだが、この関係をさらに噛み砕いて次のように述べている。

又、芸術の科学化、美の科学化、生活の科学化、道德の科学化、正義人道の科学化——有らゆるものに科学化の勢ひが見られるやうな気がする。而して、そこに新時代の真髓が看取されるやうな気がする。

ここでは「有らゆるものに科学化の勢ひが見られる」の例として、「芸術の科学化、美の科学化、生活の科学化、道徳の化学化、正義人道の科学化」が挙げられているのだが、これを裏付けるような言説を探してみると、大正七年八月に出版された座間止水著『大正青年活動準備新時代の常識』（帝国青年発行所）という書籍にそれが見られる。この書籍はどのような目的で作られたかというところ、「纂の主眼」には、

義務教育を終わる十二歳の時から、公民生活に入るべき二十歳までの間に、最も切実に感ずる「必要」(Necessity)、公益 (Utility)、興味 (Interest) の三要素に依り無数の常識中から取捨して、七百項を按配するにあつたのであります。

とある。要するに、一二歳から二五歳までの青年たちに必要と思われる智識や、彼らの興味のあるような情報を掲載した本なのだが、その項目を見ると、「家庭編」や「青年団編」、「農業編」、「兵役編」などの項目の他に「科学編」がある。

その「科学編」を見てみると、「精神病学」や「生理学」、「動物学」の他に、「道徳学」、「審美学」、「経済学」、なかには「常識ある人」や「常識養成法」、「青年の推理」といったような項目目であり、冒頭で紹介した『表現の研究』にあるように、「有らゆるものに科学化の勢ひが見られる」のである。

このように「有らゆるものに科学化の勢ひが見られる」背景に

は、大正時代における科学教育の啓蒙・普及活動の活発化があった。井上健「解説 科学の体制と科学者の思想」（井上健編『現代日本思想大系25 科学の思想Ⅰ』昭和三十九年九月）が紹介している論だが、東京帝国大学工学部教授で耐震構造学の泰斗である佐野利器は、『学芸』大正一一年一〇月号掲載の「尚科学は国是であらねばならぬ」という論文で、「私の最も必要なりとするのは、科学の普及である。国民教育の科学化である」と述べ、「今や事情が一変している。国の存立を確保するのは科学より外はない。（中略）実に科学は我等の宗教でなければならず、なお科学は我等の国是であらねばならない。」とまで言っている。

こうした科学普及の背景には、大正デモクラシーの高まりによる自由主義的教育の主張があつた。特に明治四四年に新設されたばかりの東北帝国大学に集まった学者たちは、科学の大衆化に努めた。よく知られているように、例えば物理学者の石原純は一般向けの自然科学書を多数出版しただけでなく、一九〇五年（明治三八年）に発表されたアインシュタインの相対性理論を明治末に日本で初めて紹介し、その理論の普及に努めた。この相対性理論は一大ブームを引き起こし、その後登場した「量子論」とともに昭和に入ってから、最新科学として雑誌・書籍で紹介され続けた。これらの科学書の需要は大正末に大衆の間で一気に高まるのだが、これは必ずしも学者たちの力だけによるものではなかったようだ。

このことがわかる資料が一九二六年版の『出版年鑑』^②に見られる。そのなかの「大正十四年の出版界」という章に、文芸評論家で探偵小説作家の平林初之輔の「自然科学の書物」という一文が

載っている。それには次のようにある。

ことに、今年位、自然科学方面に於て名著が続々として発刊されたことは空前であるやうに思ふ。数年前、アインシュタイン博士の来朝を期として、相対性原理に関する書物が出版界を賑はし、関東大地震の後に、従来殆んど手をつけられてゐなかつた地震学に関する書物が数種発行され相当の売行きを示し、今年から日本に四つの放送局ができて、ラヂオに関する書物、雑誌、新聞の類が雨後の筍のやうに続出したことなどは、一時期の流行におはつた部分も少くないとしても、これ等のこと柄も、一般読書人を、自然科学に親しませるに少なからぬ効果をもつてゐたことは争はれないであらう。

これによると、「一般読書人を、自然科学に親しませ」た要因として、①「相対性原理」の本の流行、②「関東大地震」による「地震学」に関する書物の流行、③「ラヂオ」に関する書物の流行が挙げられている。

①の「相対性原理」が明治末に石原純によつて紹介されたのは、前述のとおりだが、改造社の招きによつてアインシュタインが日本を訪れたのは大正十一年である。このときにアインシュタインの通訳を務めたのも石原純だが、彼によつて相対性原理に関する本が多数出版されている。②の「関東大地震」に関する本だが、大正一二年に震災が起こつた翌年、通俗科学本を多数出版している原田三夫が『地震の科学』を出版した（昭和二万日の記録2『一九八九年七月』。『昭和二万日の記録2』が紹介する原田

の回想によると、「この本は飛ぶように売れ、余震のあるごとに版を重ねた」という。原田が主筆を務める科学雑誌『子供の科学』が誠文堂から出版されたのも大正一三年だ。

③の「四つの放送局ができ」たという出来事だが、日本最初のラヂオ局・東京放送局が仮放送を開始したのは大正一四年三月である。その後、大阪・名古屋と次々に放送を開始した。そして「ラヂオに関する書物、雑誌」としては、『最新ラヂオ受信機の組立と部分品の作り方』（奥中恒一著、弘文社、大正一四年）、『誰にもわかるラヂオの製作と原理』（原田三夫著、誠文堂、大正一四年）、雑誌『ラヂオの日本』（日本ラヂオ協会、大正一四年二月創刊）など、既に大正一四年頃から数多くのラヂオに関する書籍雑誌等が出版されている。

これ等の身近な話題が人々に影響を与える一方、国単位で見ると、第一次世界大戦後の急激な資本主義経済社会の発達ということも科学の発展に関与している。高橋亀吉の『明治大正産業発達史』（改造社、昭和四年）によると、大正三年に勃発した第一次世界大戦中に、日本は（一）欧米の商品の輸入の杜絶ないし激減、（二）欧米の商品の代用としての輸出の激増、（三）交戦国の軍需品の注文の激増、（四）世界船舶の不足とわが海運ないし造船への需要の激増、のために、物価・海運は暴騰し、諸事業は巨大の利潤をほしきままにし、株価は鰻上りとなり、その結果「企業の勃興」を招来したという。

また、前掲の井上健「解説 科学の体制と科学者の思想」は、第一次大戦後の資本主義経済社会と科学技術の発展について、次のように述べている。

第一次世界大戦（一九一四・一八）は日本の科学技術にとって一つの試練であると同時に、一つの躍進期でもあった。明治末期に一応自立的な形に見えた日本の科学技術は、大戦によってドイツ製品の輸入が途絶する等ヨーロッパの科学技術から遮断されると、日常必需品はもちろん軍需物資の欠乏をみる状態を招来した。日本の科学技術はいや応なしに自立的な体制を整備する必要に迫られた。政府・軍部は総合的な国立研究機関の新設・拡充を急ぎ、文部省の科学研究奨励交付金制度（一九一八年）をはじめ振興策が積極的にとられることになった。

その研究機関の新設・拡充について、井上文は以下のように整理してくれている。

一九一八年財団法人理化学研究所の設立を見た。（中略）
このころから金属材料研究所（一九一九年）、航空研究所（一九二一年）、陸軍科学研究所（一九一九年）、海軍技術研究所（一九二三年）等の新設をみ、産業界でも多数の企業が研究体制の新設、拡充をはかった。要するに、日本の資本主義が大戦の好景気の中で独占の本格的成立へと発展する情勢に支えられ、大戦前から論じられていた組織的な研究活動の振興が一挙に実現されていったのである。

さらに、「1. モダンイズムとアメリカ化——一九二〇年代を中心

として」（『日本モダンイズムの研究』南博編、昭和五七年、ブレーン出版）の中で、佐藤毅は電力事業の発達や長距離高压送電の開始を背景とした都市と郊外の電車網の発達やデパートや映画館など娯楽施設の充実、さらに文化住宅の流行や電灯取付数の増加などの都会のモダン化は、第一次世界大戦後の技術革新を契機とする資本主義の発展がもたらしたものと述べている。

ここまですべてをまとめてみると、アインシュタインの相対性理論への関心の高まり、科学に目を向けるキッカケとしての関東大震災、ラジオ放送の発展、といった大衆レヴェルでの科学への関心の高まりと、第一次世界大戦による資本主義経済の発達という国レヴェルでの科学技術の発展。この二つが合わさって大正の「科学の時代」を作り出したといえる。

そしてこの科学の時代を引き継ぐ形で始まったのが、昭和という時代なのである。この時代に、科学は大衆の間へ様々な形で浸透していった。まず通俗科学本が数多く出版された。この通俗科学本の流行は、専門家や学生以外の一般の人たちにも科学を学ぶ機会を増やし、女性の読者をも獲得することによって、それが科学を学ぶ女性の増加に繋がった。この、女性への科学の浸透は、大正末から昭和初期にかけて登場した「モダンガール」という現象にも影響を与えた。

さらに、文学の世界では、モダン日本と科学の関係を、新感覚派や新興芸術派のようなモダンイズム文学の作家たちが、競って描いた。このように科学を描く作品が増えるのと並行して、横光利一、中河與一のように科学と文学の関係を論じる作家や評論家たちが現れ、こうした作家たちの言説に対して石原純のような科学

の専門家たちも口を出すようになった。一方、大衆文学の世界では、海野十三や直木三十五、木々高太郎のように、科学を扱った作品、随筆を詳細に分類し、「科学小説」というジャンルを確立しようとする作家たちが現れた。

このように、大正から昭和にかけての科学は、大衆・文化・文学と様々な方面へ影響を与えたのである。最終的に本研究のめざすところは、大正から昭和にかけての、科学の時代と文学との関わりを明らかにすることだが、本論文では、科学と大衆という問題を文学を手がかりとしつつ見ていくこととする。

二 科学本の増加

前掲の平林初之輔の「自然科学の書物」は、冒頭で大正一四年の出版界を評して次のように述べている。

数年前までは、自然科学に関する書物は、大部分、受験用の参考書であつて、それ以外の書物は、発行部数も少なく、読者も少なかつたようである。自然科学の真面目な書物が可なり多数の読者から要求され、それが相当の売行きを示して来たのは、極く最近の現象であるやうである。これは一時の流行若しくは人気の転換と見るよりも日本の読書界のレヴェルが高まつて来たことを示す、喜ばしい徴候であると私は考へてゐる。

このなかで「真面目な書物」と平林は言っているが、どのよう

なものを指すのだろうか。平林は、右で紹介した文章の中で、自分が「自然科学を専攻してゐるものでないから、この方面の書物をあんまり読んではゐない」うえに「あまりにも専門的なものは読んでもわからない」といったん断つたうえで、自然科学の本を、「思ひ出づるまゝに、二三の書物に就いて所感を述べ」といつて何冊か紹介している。

そのうちの一冊は大正一四年に岩波書店から出版されたジャン・ペラン著／植村琢、玉虫文一、水島三一郎訳の『原子』という書籍である。「千九百十二年にフランスのフェリックス・アルカンの科学叢書の一部として出版されたもの」で、「今日の理論科学の中心的興味をなす、分子、原子等の問題について興味を持つ研究者の必読すべきもの」と紹介している。

他には、佐藤充・庄司彦六共著『近代物理学概観』（改造社、大正一四年）や石尾貞朝著『生物化学』（内田老鶴圃、大正一四年）などを紹介している。さらに、『フラマリオン社自然科学叢書』（全五輯、叢文閣、大正一三から昭和三年にかけて出版）中の『第二輯 晩近の思想』（アンリ・ポアンカレ著／岡谷辰治訳、大正一四年）と『第三輯 科学と実在』（ピエール・デルベ著／平林初之輔訳、大正一四年）を紹介している。これら以外にも様々な科学書を紹介しているのだが、このなかでポアンカレの著作は昭和に入っても訳本が多数出版され、科学者や文学者などの知識人に読まれていた。しかもここで平林が紹介している本は、「研究者の必読すべきもの」と言っているように科学の専門的な書籍だ。

このような専門的な科学の書籍の広告は新聞にも載るが、新聞

コラムにも専門的な言説が掲載されていた。『東京朝日新聞』を例にとつて昭和元年から一〇年までを見てみると、科学コラムがずらつと並んでいる。

例えば、大正一五年二月一四日から昭和五年一〇月二日まで連載された「学界余談」というコラムだ。哲学、社会科学、医学など様々な分野を扱っているのだが、科学記事が多く扱われており、例えば、理化学研究所・桜井季雄「紫外線によるけい光の利用」（昭和二年一月二日付け）、水産講習技師・妹尾如海「科学と産業の融合」（昭和二年三月一日付け）、医学博士・浦本政三郎「科学と宣伝」（昭和三年五月一〜二三日連載）など、科学に關係するコラムが掲載されることも多かった。ちなみに、このコラムは科学記事に限らず専門的な内容を扱うことが多く、専門家同士の論戦が繰り広げられることもあった。

先程紹介した、浦本政三郎の「科学と宣伝」という記事に対して、同年五月二九日からの「学界余談」では、京都帝大教授医学博士・大塚藤吉「神経の興奮伝道」（二九日〜三一日連載）という記事が、副題を「浦本博士の『科学と宣伝』に対する批判」として、「引例の中に誤びうが二箇所ある」と指摘している。

このような科学者同士の指摘、論争などのやり取りの他に、「科学哲学」なるものに関する記事も掲載されていた。例えば、昭和二年一月五日掲載の「学界余談」では『科学の破滅』という書籍が紹介されているが、その内容については次のように書かれている。

古代の哲学はあまりに煩瑣になつて遂に亡びた。これに代

つた近世科学（著者は物理学に例を引く）も現在の傾向的にはだん／＼論理的煩瑣に陥つて行くからこのまゝでは遂に破滅するだらうといふのが本當の大体の趣意である。

悲観的な見方が示されているが、「科学哲学」をめぐるものであり、また、この著者である「ディングラー氏」についても「マツハの弟子といはれ」た人物で、「この回轉期に臨んで本書においてマツハに似た科学の理想を述べたもの」とされている。

三 通俗科学の氾濫

だが、昭和の科学をめぐる言説はこのような専門的なものだけではない。昭和に入ると、通俗科学と呼ばれる、大衆向けの科学が登場するのだ。昭和四年七月七日付の新聞各紙には原田三夫著『誰にもわかる科学全集』全一二冊（国民図書、昭和四〜五年）の第一回配本の広告が掲載されているが、「知識に渴した大衆へ早天の豪雨／通俗科学の円本つひにあらはる」とある。円本とあるとおり「一冊一円」という安価を謳った全集だ。「知識に渴した大衆へ」とあるように、一般読者が科学知識を求めていることが前提となっている。他にも岩波書店から『通俗科学叢書』と呼ばれる科学本シリーズが大正一一年から昭和一〇年にかけて出版されている。

書籍だけでなく、新聞でも通俗科学記事は多く書かれた。例えば、前述の「学界余談」を連載した『東京朝日新聞』には、「大衆科学」というタイトルの身近な科学コラムも連載されていた

(昭和三年五月一二日)。このコラムは、「読者の出題歓迎します一般の方の利用、興味多きもの、ハガキにて学芸苑」(「大衆科学」昭和三年五月一五日付け)とあるように、読者による投稿を促している。そしてこの投稿を促す記事とともに掲載されたコラムでは、「現在の顕微鏡でどの位見える」という風な素朴な疑問が、「[ですます調]で堅苦しくならないように書かれている。さらに、最新の顕微鏡で見えるものの紹介では、「水素分子の四倍即ち約〇・〇〇〇〇〇〇四ミリの大きさのもの」という文の後に、「いひ換えると二万倍してケシ粒の大きさになる位の微小なもの」というように、専門家ではない「一般の方」にもわかるような表現をしているのである。

以後の「大衆科学」欄を見ても、「家庭向きのカラーの洗濯法」(昭和三年五月二三日付け)、「牛乳と酸のものと併食は差支ない」(昭和三年五月三一日付け)、のように家庭的な内容から、「体温と食事等の関係」(昭和四年四月一日付け)、「ダイヤモンドの見分け方」(昭和四年四月三日付け)といったように、健康から生活の知恵に関するものまで内容は様々だが、身近な話題が毎日掲載されている。この連載は昭和六年一月二七日付けまで確認できる。

このように『東京朝日新聞』を例にとると、「学界余談」には専門的な科学記事が、「大衆科学」には身近な科学記事が、といったように両方が載せられているのだが、雑誌にもこのような傾向は見られる。

「日本一おもしろい! 日本一ためになる!」をキャッチフレーズに大正二三年に創刊された『キング』では、昭和三年に「科

学の驚異」と題して、「米国の潜水艦エス四号の内部」と「英国に於て建造中の龐大な飛行船」(昭和三年七月)の写真を載せており、昭和四年一月号では「科学挿話 物云ふ石」(ハワイなどにある鳴石の話―城所注)、昭和四年三月号では「日本学界の誇」と題してベスト菌を発見した北里柴三郎をはじめとして、鋼鉄、物理学など各分野の専門家を紹介、さらには、「科学的探偵術」と題した写真による人物鑑定術や、パリの警視庁にある「指紋陳列室」の紹介をしている。

その他、『アサヒグラフ』では、昭和二年七月六日発行号の「科学の世界」という記事中で、パリの貧民救済局に設置された最新の「自動式パン製造設備」と、ドイツで使用されている「プロペラポート」が紹介されている。

当然、『キング』のように創刊号で七四万部、二年目には百万部を突破したというような大衆雑誌に掲載されるといふことは、それだけ大勢の読者の目に留まるはずだし、また、これらの記事が掲載されたのも、それだけ「科学記事」の需要があったからこそだろう。

ところで、岡邦雄は「科学と時代」(「科学と文学」三笠書房、昭和十一年)という文章で、次のように書いている。

最近科学に底力ある関心が、また一般大衆の間に高まつて来ているようである。新聞は学芸欄その他に於て科学的記事をずつと増してゐる。通俗雑誌の売れ行きも増してゐる。また科学の通俗的な解説が生半可な文筆家によつて行はれてゐるのに不満を感じながら、自分たちは実験室内にのみ閉じ籠

つて、さういうものに手を出すのを屑しとしないといふやうな、専門科学者の間に支配的であつた傾向が、近頃は少しずつ精算されて、高名な特殊科学の権威で、しかも科学の通俗的叙述に卓れた意味での才筆を揮う人も増えてきた。

昭和に入つて増加した通俗科学の言説に対する「底力ある関心が、また一般大衆の間に高まつて来ている」旨が指摘されている。では、通俗科学がここまで読まれた理由はなぜか。文学作品に描かれた科学書の読者たちと、照らし合わせてみていきたいと思う。

四 科学本の読者たち

科学本のなかには、講座ものと呼ばれるものがある。例えば、大正一五年から昭和四年にかけて建築書院から出版された『通俗科学電気講座』がそれだ。また、昭和二年から三年にかけて『通俗科学講座 ラヂオ講演』全三巻（日本放送協会関東支部編、日本ラヂオ協会発行）というようなものも出版されている。

これらと似たようなものとして先程、「通俗科学の円本」と新聞広告にうたわれた『誰にもわかる科学全集』（原田三夫著、全一二冊、国民図書）を紹介したが、「誰にもわかる」科学本は人々が独学で学習する機会を広げるきっかけを作った。そして、文学作品にも独学で科学を学ぼうとする読者が描かれるようになる。

例えば、徳永直に、「飛行機小僧」（中央公論）昭和十二年五月）という作品がある。この作品では、岩手県から川崎にある電機製作所に勤めるために一五歳で上京してきた「太作」という少

年が主人公である。太作は「飛行機のエンジンとか、汽罐車のピストンとかを作るえらい技術者になつて、今に在所の人々をおどろかしてやる」という思いを胸に、「父親から貰つた五十錢玉や小遣いなどを貯めて『工業講義録』をとり、航空機に関する書物を買つて」、生意気だと先輩やほかの同僚たちに本を取り上げられたりしながら読んでいるのだ。「飛行機小僧」の太作のように、働きながら、科学を学ぶ人間は他にも描かれている。

片岡鉄兵の「電気化学独習書」（『文芸春秋オール読物号』昭和五年七月）という作品も、そうしたものの一つである。内容を紹介すると、来年女子大の理科を卒業する松子は、ブルジョアの家庭に生まれながら、父母の思いがつた行動にいつも反感を感じている。京都の華族の息子である榎麿に求婚されているが、承諾しない。五月のある日、自宅の庭にある椅子に腰掛けている時に、榎麿に声をかけられるが、松子はその存在を露骨に無視して、眼の前のテーブルに「 $AgNO_3 + KCl$ 」という書きかけの化学式をかいてその場を去つてしまふ。ところが散歩してから庭のテーブルに戻つてくると、先ほどの化学式が「 $AgNO_3 + KCl = AgCl$ 」沈殿+KNO₃」という完成形になっていた。その日の夕方から松子の態度はがらりと変わり、母に榎麿との結婚を承諾したと伝える。翌日、昨日とは全く異なつてへりくだつて榎麿に接する松子だが、二人がテーブルのところで談笑していると、庭の草取り人夫が「忘れ物をした」と声をかけてくる。松子の尻の下にあるというその忘れ物は一冊の本で、表題に「電気化学独習書」と書かれていた。そのことを知った松子は「プロレタリアは貴族より無智だと考えてゐた妾の大変な間違ひでございましてわ！」と泣

き出してしまふ、という短い作品である。ブルジョア家庭の庭の草取り人夫がもっていた本のタイトルが、そのまま作品名になっているのであり、「飛行機小僧」の太作の『工業講義録』同様、独学で科学を学ぼうとする読者が文学作品に描かれた例の一つである。

ちなみにここに出てくる「電気化学独習書」のような書物は実在するのだろうか。昭和元年から「電気化学独習書」が発表された昭和五年までに発行された書籍で、「電気化学」と題の入ったものを調査してみると、『アルス電気工学大講座』全一九巻が昭和二年から四年にかけて刊行されており、このなかに『電気化学』（加藤与五郎著）という本が入っている。また『電気化学の理論及応用』上下巻（亀山直人著、丸善、昭和五年）などもある。「電気化学独習書」を独習する労働者は決して空想上だけの存在ではなかったのである。

ここで、この章の冒頭で紹介した科学本の講座ものに話を戻すと、それらは「通俗」とは言っても一般向けの単なる通俗本などではなく、「飛行機小僧」の太作が読んでいた『工業講義録』や、「電気化学独習書」の労働者が読んでいた「電気化学独習書」のような、技術者向けの専門書や独学で学ぶ人向けの教科書のようなものだったのではないだろうか。だとすると、当然それらは、前掲の平林初之輔が紹介していたポアンカレの著作のようなものや、『東京朝日新聞』の「学界余談」欄に登場するような、「科学哲学」と呼ばれる分野の書物とも別種のものであったはずである。

五 通俗科学と読者

「三 通俗科学の氾濫」で述べたように、新聞や雑誌などでは、顕微鏡の性能、シミ抜きの方法、最新のパン製造機、のように身近な話題を扱うことが多かった。そして、このような身近な科学を扱う通俗科学と専門的な科学とを共に扱う科学雑誌の流行は、人々のあいだに科学を広める役割を果たした。日本における家電普及の歴史を紹介している『家電今昔物語』（山田正吾ほか著、三省堂、一九八三年七月）の中に、テレビ技術の先覚者山本忠興氏へのインタビューが掲載されている。

私と家電とのかかり合いは「子供の科学」を愛読していたあたりからですね。この雑誌は、大正一三（一九二四）年に誠文堂新光社から創刊された、一般的な科学知識を満載したものです。天文、物理、化学などを大変わかりやすく解説し、欧米の先端技術も要領よく紹介されました。当時、この本を読んで、その後、科学者、技術者に育った人は数えきれないほどいると思います。

この雑誌に触発された私は、高度な「科学画報」や「科学知識」をむさぼり読んだものです。（中略）

考えてみると、これらの紙面には、欧米の家庭電化生活が紹介されましたが、今でいえば、ややS.F的な扱いをされていたものです。それだけに、よけい魅力的に感じられ、胸躍らせて眺めたものです。

前述のように、『子供の科学』は大正一二年四月に誠文堂から、『科学画報』も同社から大正一二年四月に、そして『科学知識』は大正一〇年七月に日本科学協会から創刊されている。「家電とのかかり合い」とあったように、このような雑誌でも身近な話題を扱うことが多かった。勿論、家電のような身近な話題だけでなく、最新の科学を紹介する記事もあったし、その記事を書く科学者たちはその分野の第一人者たちだった。

例えば、『科学画報』ではたびたび石原純が登場し、「最新の原子構造論」（昭和二年一月）という記事や、『科学画報』主催の「ニウトン二百年記念講話」における石原の「ニウトンとアインシュタイン」という講演内容が田中館愛橘の「萬有引力に就て」とともに掲載されている（昭和二年五月）。石原純といえればアインシュタインの相対性理論であり、当時の科学書や新聞でこの名前を見ない日はないほどだった。他にも石井重美や永井潜といった学者たちも新聞や雑誌、科学本でよく見かける名前だった。

このように『子供の科学』や『科学画報』のような「科学雑誌」は、山本忠興氏のように、より高度な科学の知識を学ぶきっかけになったのだが、インタビュ어의なかで家電が「SF的な扱い」をされていたとあったように、科学を取り巻く話題についての記事も書かれていたりもした。

例えば、先程紹介した『科学画報』昭和二年一月号には「百年後の世界」という特集が組まれている。ただし、このなかでも「天体との交通問題」は理学博士の関口鯉吉が、また「百年後の建築」は当時、東京帝国大学で教鞭をとっていた建築学の専門家である

岸田日出刀が執筆しており、「天体との交通」は今の科学力では不可能と断言するなど、デタラメな科学知識をふりまくわけではなく、むしろ最新の科学がわかりやすく紹介されるため、当時は山本氏のように「むさぼり読んだ」読者は大勢いたにちがいない。

次に、このような雑誌記事をよむ女性の読者が描かれている作品を紹介したいと思う。昭和四年四月に発表された池谷信三郎の「郵便」（新興芸術派叢書第二十編 有閑夫人）所収、新潮社、昭和五年）という短編だ。この小説は、倦怠期を迎えた結婚生活を送っている濱吉という男が、ある日、自分と同じビルディングに働く「まち子」と言う女性から手紙を受け取るというはなしである。この作品の冒頭で、濱吉が結婚したばかりの時のことを回想する場面は次のように描かれている。

長火鉢の向うから、話しかける妻の会話は、どんな事でも興味を持たず持たず。火星に人が棲んであるとかあないとか、半搦米にヴィタミンがあるとかないとか云つたやうな、そんな話だつた。⁵⁶

このなかで「半搦米にヴィタミンがあるとかないとか」とあるが、こうした話題は「家庭科学」と呼ばれ、人気があった。昭和二年には『家庭科学大系』（加賀豊彦編集、文化生活研究会）の配本が始まっている。昭和二年五月六日付けの『東京朝日新聞』にその広告文が掲載されているが、それをみると次のように書いている。

最も経済的に、そして最も科学的に、最も宗教的に、そして最も芸術的に、類れ行く家庭生活をエデンの花園のそのの如くに、聖く高く引上げる使命を帯て此大系は生れた。此書を讀まずして何人も家庭生活を日本に於て語ることは出来ぬ。

加賀豊彦

「経済的に」とか「科学的に」とあるように、この頃は「合理的な家事」という言葉が流行っており、電化製品や電化設備の整った文化住宅が雑誌でさかんに紹介されている。

さらに注目すべきは「火星に人が棲んでゐるとかゝらないとか」という話を妻がしているのだが、「火星」の話題も雑誌を賑わせていたものの一つだった。先程紹介した『科学画報』（昭和二年一月）には火星人の話という項目があるし、同じ号の特集「百年後の世界」で関口鯉吉が担当した「天体との交通問題」（前述）でも、「種々の点に於いて地球と稍類似した状態にあると目されて居るのは火星と金星であつて其処に人類が生存し得るや」と、論じられている。

また、これも先程紹介した全集だが、『誰にもわかる科学全集 2 空の神秘』（昭和四年五月）では「火星の生物」という項で、「地球以外にも生物が棲めるか」というテーマを扱っており、冒頭で次のように述べている。

「火星に人類が棲んで居るか」、恐らくこれほどわれわれの好奇心を誘つたそゝる問題はあるまい。殊に、大震災の翌

年火星が久しぶりで最も地球に近づいたとき、その稀な観察の好機会をとらへてこの問題を解決したいものと世界の天文学者が色めき立つに及んで、それが一般の人々の話題にも、盛に上るやうになつた

このように大衆向けの科学全集にも、「火星に人類が棲んで居るか」が、「一般の人々の話題にも、盛に上るやうになつた」と書かれている。

ゆえに、先程紹介した池谷信三郎の「郵便」のなかで、「妻」が「家庭科学」の話題と共に「火星に人が棲んでゐる」とかという話題をもちだしても不思議ではない。しかも、この「妻」が「科学雑誌」からそうした知識を得ていることがわかる個所がある。濱吉と「まち子」からの手紙のなかに、次のように書かれているのである。

何か科学の雑誌で読んだのですが、鈍くなつた剃刀の刃を、南北の磁石の方向と平行だかに置いとくと、理屈は忘れて了ひましたが、何でも、その鋼鉄の電子とかがどうとかして、よく切れるやうになるんですつてね。ですから、微妙な人間の脳髓が、磁石の影響を受けないと思ひますわ。

この小説に登場する「まち子」と名乗るこの手紙の送り主は、実は「妻」であることが小説のラストでわかる仕掛けになっているのだ。つまり、「半搗米にヴィタミンがあるとかないとか」と

いうような「家庭科学」記事だけでなく、「火星に人が棲んでおるとかいけないとか」という話題や、「剃刀の刃を、南北の磁石の方向と平行だかに置いとく」とよく切れるようになると言う怪しい科学まで、「妻」はそれらを「科学の雑誌」などで情報を得ていたことになる。

以上見てきたように、昭和前期の文学作品の中には、「講座ものの」科学本を読んで独学で科学知識を得ようとする人物が描かれた「電気化学独習書」や「飛行機小僧」のような作品がある一方で、「郵便」のように、科学雑誌を読む女性が描かれた作品もあるといったように、様々な科学書の読書の様子や読者の姿を、そこからうかがうことができた。大正から昭和にかけての、科学の時代と文学との関わり合いの、ささやかな一コマの発掘と紹介とをこころみ次第である。

注

- (1) この文章の存在については藤井淑禎先生より御教示いただいた。
- (2) 引用は『出版年鑑 第一巻 昭和元年版』国際図書センター、二〇〇七年（底本『出版年鑑』国際思潮研究会「読書人」編纂、大正一五年一月発行）から引用した。
- (3) 引用は、『徳永直文学選集』徳永直没後五〇年記念事業期成会「選集」編集委員会編纂、熊本出版文化会館発行、二〇〇八年五月。
- (4) 『科学画報』第八巻一号、昭和二年一月一日発行、成文堂新光社。

(5) 引用は、ゆまに書房から二〇〇〇年三月に刊行された復刻版による。

〔付記〕 本論文は二〇一二年一月提出の立教大学修士論文「昭和の科学と文学」の冒頭部分をまとめたものであり、これに続く、女性と科学、モダン日本と科学、スピード時代、飛行機という可能性、海野十三と科学小説、などの章も機会があれば発表していきたい。なお、漢字は新字体に改めた。

（きど）ころひろみ 大学院前期課程修了生